

# OKFA テクニカルレポート 2024

令和6年度 第10回 4地区カブス交流大会 決勝ラウンド

会場: 網走呼人トレーニングフィールド

日付: 2024年10月13日(日)

文責: 平子、関口、蝦名

## [大会概要]

- リーグ形式(2ステージ制)  
1日目…十勝、釧路、根室地区上位2チームの6チーム、及びオホーツク地区上位3チームの合計9チームを3グループに分け、総当たり  
2日目…各グループの1~3位で再度グループを作り、総当たり
- 試合時間 50分(25分ハーフ)

## [対戦カード]

① 北見北中 VS 光洋、歯舞、柏陵合同(前半 25分) 3-0

② FC網走U15 2nd VS 帯広FC(後半 25分) 0-0

※②については動画データ破損のため、①のみデータ分析を行った。

## [データ分析]

カード① (北見北中 VS 光洋、歯舞、柏陵合同(前半 25分))

	北見北中	光洋、歯舞、柏陵合同
スコア	3	0
シュート数	7	0
ポゼッション※1	5	2
CK	3	0
FK/間FK	0/0	0/0
GK	1	1
クロス	3	2

## 【成果】カード①

### ● ポゼッション

短い距離のパスを有効活用し、ポゼッションの回数を増やすことで攻撃にリズムが生まれた。キーパーやディフェンスラインからのビルドアップや、プレッシャーのない比較的余裕のある状態であれば、冷静に前を向いてフリーの選手を適切に使って効果的なポゼッションをしていた。

### ● 修正力

ポゼッションの回数では勝っているが、試合前半はディフェンスやボランチから直接中央のトップの選手にボールを当てるシーンが多く、攻撃が単調であり得点に繋がらなかった。前半 12 分を経過したあたりからサイドを活用した攻撃が増え、得点につながる、あるいはチャンスメイクの場面が増えた。(前半 13 分、右サイドからのドリブル突破による得点)

### ● 組織的な守備

相手チームにスピードがありドリブルが得意な選手がおり、攻撃はこの選手を中心に展開されていた。センターバックやゴールキーパーを中心にディフェンスラインが複数でこの選手の対応に当たり、サイドに追いやるなどして決定機を作らせなかった。

それ以外の場面でも、奪いどころでリスクを取りながら人数をかけてボール奪取する姿勢が共通認識としてあった。

## 【成果】カード②

### ● 強度

1位リーグにふさわしく、足下の高い技術に加え、特に攻撃においてボール際でも負けない強さが見られた。ディフェンスは空中戦の強さも光った。

### ● ゲームスピード

パスのスピードや精度が2位リーグと比べ高く、早い展開で攻撃を仕掛けられていた。特に左サイドバックやボランチの選手にボールが入ることで攻撃のスイッチが入り、チャンスメイクにつながることも多くあった。

### ● 組織力

試合中、声かけが途切れることがなかった。特に攻撃において、中心となる合選手を中心に効果的な声かけを行うことができていた。

### ● ビルドアップ

縦への選択肢を優先的に持ちながら、状況に応じてキャンセルし、サイドから上がってくる選手を効果的に使ってビルドアップを図っていた。

## 【課題】カード①

### ● パス／トラップの質

ポゼッションの回数では勝っていたが、1位リーグの試合と比べ、全体的なパススピードやパス・トラップの精度で劣っていた。短い距離のパスだけでなく、ロングボールやサイドチェンジを活用し、コートを広く使ったポゼッションができるようなスキルや視野の広さが求められる。また、キックの左右差が大きく、ボールを持ち変えることで時間がかかってしまい、素早い展開に繋がらないシーンがあった。

### ● 移動中の視野

上記と関わって、特にボランチの選手をはじめ、後ろ向きでボールを受ける際に周囲の確認ができておらず、無理に前を向いてボールロストするシーンが多かった。移動中の視野の確保はもちろん、周囲からの声かけ等を行い、プレッシャーのある状態でもしっかりとボールコントロールできる技術やチーム力が求められる。

### ● ポゼッションの意図

ポゼッションの回数や支配率では相手に勝っているが、崩しからの得点は生まれなかった。

1点目(前半3分) ⇒ 高い位置での相手のパスミスからゴール

2点目(前半13分) ⇒ ハーフライン付近からサイドハーフの選手のドリブル突破によりゴール

3点目(前半23分) ⇒ コーナーキックのこぼれ球からゴール

全体的にポゼッションの位置が低く、相手の脅威になるようものにはなっていなかった。個人技は高く、前向きの状態でボールを持てれば脅威はあったが、崩して得点を取れるような戦術が求められる。

## 【課題】カード②

### ● ゴール前の守備

失点こそなかったが、スピードを持って攻撃を仕掛けてくる相手選手に対して、簡単に足だけでディフェンスに行ってしまうピンチを招く場面があった。体格差や相手のスピード、プレースタイルを理解した質の高い守備が求められる。また、片方のサイドから攻撃されている際に逆サイドの選手の準備ができておらず、裏を取られるシーンもあった。

### ● ラストパスの質

ペナルティエリア付近までボールを運ぶ力は高いが、決定機を創出するようなラストパスは少なく、フィニッシュまでの流れが単調だった。サイドからのクロスも精度に掛けていた。ドリブルを仕掛ける選手をフォローする見方も少なく、ボールウォッチャーになっている場面があった。

### ● フィニッシュの質

上記と関わって、ペナルティエリア外からのミドルシュートが多くあったが、ゴールを脅かすような質ではなかった。基本的なシュート力や精度が求められる。

【高校年代に向けて】 上記の課題について、高校年代で求められるものを以下に簡単にまとめる

### ① プレーの強度

足下の技術が求められる一方で、特にオホーツク地区の課題としては、フィジカル差がある相手に対して、高い強度でどれだけ満足にプレーできるかが問われる。基本的な体作りに加え、足下のテクニックのみに頼らないプレーや判断を身につける必要がある。

### ② フィニッシュの質

第103回全国高校サッカー選手権大会の各地区予選は、1点の重みを強く感じられる試合が多くあった。一つ一つのパスやポゼッションについて、それが何を目的としているのかをチーム全体で考え、精度の高いフィニッシュによって1点を奪取する意識を日々の練習から高めることが求められる。

